

福岡市方言の準体助詞にみられる言語変化

平 塚 雄 亮

1. はじめに

本稿では、福岡市方言において使用されている準体助詞にみられる言語変化について論じる。これまでの福岡市方言を対象とした研究では、伝統方言形¹⁾のトのみならず、ノヤンといった非伝統方言形²⁾が使用されるようになっていくという事実は報告されているものの、それぞれのバリエントがどのような用法や統語環境において現れるのかといったところまで踏み込んだものはみられない。本稿のように準体助詞のバリエントとその出現環境に注目することで、いったいどういった用法や統語環境において非伝統方言形が受容されやすく、また、伝統方言形が維持されやすいのかといった観点から、言語変化を観察することができると思われる。このように本稿では、方言の維持と変化が同時に観察される項目について分析することで、現在進行中の言語変化のあり方をとらえることができるのではないかと提唱する。

以下、まず2節で先行研究についてまとめ、3節で使用する資料について説明する。4節で分析の枠組みについて述べ、5節で調査結果を提示する。6節では5節の調査結果をもとに考察を行う。7節ではまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究

本稿の目標は、準体助詞に起こっている変化の実態について明らかにすることである。先行研究によると、福岡市方言の準体助詞には(1)、(2)のような変化が、特に若年層において観察されているという。

(1) 体言に準体助詞トが直接接続するようになっている

(2) 非伝統方言形の準体助詞ンが用いられるようになっている

(1) について述べたものとしては、陣内 (1991 ; 2006)、陣内・坪内 (1995)、原田 (2007) などがある。陣内 (1991 ; 2006)、陣内・坪内 (1995) は主にアンケートを用いて、伝統方言ではみられなかった「体言+ト (雨トなど)」の存在について報告したもので、原田 (2007) はそれを自然談話資料を用いて実証している。(2) については二階堂 (2008)、太田 (2009)³⁾ があり、アンケートを用いてンが使用されていることを指摘しているものの、いったいどのような用法や統語環境においてンの広まりがみられるのかはまだ明らかにされていない。本稿ではこの点について、準体助詞の機能を代名詞的用法・名詞節用法・ノダ文に分けて考えることで、準体助詞の使用実態を詳細にとらえることを目指す。

3. 使用する資料

本稿では、できるだけ実際の言語使用状況を写し取ることを目的としているため、アンケートなどでの言語使用意識を問うことでデータとするのではなく、筆者の収集した自然談話を文字化したもの (テキスト) を用いて分析を行うことにする。テキストは高年層によるもの、若年層によるものをそれぞれ収集し、2つの離れた世代のデータを比較することで、今日の前で起こっている変化とはどういったものであるのかという点について具体的に明らかにしていく⁴⁾。

テキストの収集は、2008年から2010年にかけてすべて筆者が福岡市内で行った。高年層のテキストは話者20名 (男性10名、女性10名) による10本 (表1参照)、若年層のテキストは話者18名 (男性9名、女性9名) による10本である (表2参照)。若年層のテキストのうち、FUYは若01Mと若02Mの2つのテキストに、YONは若06Fと若07Fの2つのテキストに参加しているが、これはそれぞれの話し相手 (若01MのHASと若02MのMAG、若06FのINMと若07FのGOA) が親しく会話ができる相手としてFUYとYONを選んだためである。

話者の選定にあたっては、以下のような条件を設けた。

- (3) 高年層：テキストの収集年である 2010 年の時点で 65 歳以上であること、つまり、1945 年以前の生まれであり、調査時に福岡市に居住していること。福岡市外での居住歴については、おおむね通算 10 年程度以内であること。
- (4) 若年層：テキストの収集開始年である 2008 年の時点で 18～25 歳であること、つまり、1982～1990 年生まれであり、調査時に福岡市に居住していること。18 歳までの福岡市外での居住歴については、おおむね通算 5 年程度以内であること。

12 歳までのいわゆる言語形成期については、約半分の期間福岡市に居住していれば条件を満たすものとした。以上のような条件のもとに話者を選定し、カジュアルな話ができる親しい同性で話し相手を探してもらい、ペア (2 人) で話をしていただいた。談話収録中は筆者は同席せず、公民館や大学の空き教室などの雑音の少ない静かな部屋で、それぞれ 30 分以上録音した。そのうち、テキストの冒頭部分は緊張するなどして不自然な発話が見られることもあったため、筆者の判断で話者が録音を意識しなくなった部分からを分析の対象とした (よって、テキストによって分析対象となる時間に差が生じた)。話題はこちらからは特に指定せず、自由に会話を行ってもらっており、談話収録後にはそれぞれの話者からデータの使用許可をいただいた。すべてのテキストのうち本稿で分析対象とした部分の合計時間は、高年層が 7 時間 38 分 44 秒、若年層が 6 時間 35 分である。

4. 分析の枠組み

ここでは、準体助詞の分析に用いた方法について述べる。収集対象とした準体助詞は、伝統方言形であるトのほか、非伝統方言形のノ・ンである。本稿ではこれらの準体助詞が、どのような用法や統語環境に現れるのかを分析するわけであるが、山口 (2000)、彦坂 (2006) を参考に、まず大きく以下の (a)～(c) の用法の分類を行った。(5)～(13) の例文では、標準語形はひらがなで、伝統方言形はカタカナで示す。

表1 高年層のテキスト情報

談話 ID	収録年	談話時間	話者 ID	生年 (調査時年齢)	居住歴
高 01M	2010	56 分 40 秒	TAS	1937 (72 歳)	0- 福岡県福岡市
			MAH	1938 (72 歳)	0-22 福岡県福岡市 22-27 大阪府大阪市 27- 福岡県福岡市
高 02M	2010	49 分 39 秒	HIT	1939 (70 歳)	0-4 福岡県福岡市 4-6 福岡県筑紫野市 6- 福岡県福岡市
			UET	1942 (67 歳)	0-7 福岡県北九州市 7-30 福岡県福岡市 30-34 アメリカ 34- 福岡県福岡市
高 03M	2010	40 分 39 秒	HAM	1942 (68 歳)	0-30 福岡県福岡市 30-33 大阪府高槻市 33- 福岡県福岡市
			NAH	1930 (80 歳)	0- 福岡県福岡市
高 04M	2010	43 分 8 秒	SHT	1940 (69 歳)	0- 福岡県福岡市
			HAK	1939 (71 歳)	0-6 福岡県福岡市 6-7 福岡県宗像市 7- 福岡県福岡市
高 05M	2010	42 分 51 秒	MIK	1939 (71 歳)	0-22 福岡県福岡市 22-24 東京都 24- 福岡県福岡市
			KAK	1939 (71 歳)	0-18 福岡県福岡市 18-22 京都府 22-23 大阪府 23- 福岡県福岡市
高 06F	2010	63 分 37 秒	YAC	1932 (78 歳)	0- 福岡県福岡市
			SUC	1940 (70 歳)	0- 福岡県福岡市
高 07F	2010	36 分 25 秒	MAM	1939 (70 歳)	0- 福岡県福岡市
			AOK	1939 (71 歳)	0- 福岡県福岡市
高 08F	2010	37 分 5 秒	OSH	1934 (75 歳)	0- 福岡県福岡市
			ICY	1935 (75 歳)	0- 福岡県福岡市
高 09F	2010	42 分 15 秒	OTK	1944 (65 歳)	0- 福岡県福岡市
			HIS	1945 (65 歳)	0- 福岡県福岡市
高 10F	2010	46 分 25 秒	NAY	1939 (71 歳)	0- 福岡県福岡市
			MIC	1944 (66 歳)	0- 福岡県福岡市

表2 若年層のテキスト情報

談話 ID	収録年	談話時間	話者 ID	生年 (調査時年齢)	居住歴
若 01M	2008	43 分 28 秒	HAS	1982 (25 歳)	0-1 三重県四日市市 2-3 東京都 3-18 福岡県福岡市 18-20 東京都府中市 20-21 イギリス 22-23 東京都国分寺市 24- 福岡県福岡市
			FUY	1982 (25 歳)	0- 福岡県福岡市
若 02M	2008	31 分 21 秒	MAG	1982 (25 歳)	0-6 長崎県 6-18 福岡県福岡市 18-23 千葉県市川市 23- 福岡県福岡市
			FUY	1982 (25 歳)	0- 福岡県福岡市
若 03M	2010	41 分 38 秒	TOY	1986 (23 歳)	0- 福岡県福岡市
			UJK	1986 (23 歳)	0- 福岡県福岡市
若 04M	2010	39 分 15 秒	OTT	1988 (22 歳)	0- 福岡県福岡市
			MIT	1988 (22 歳)	0- 福岡県福岡市
若 05M	2010	40 分 23 秒	ENT	1985 (25 歳)	0- 福岡県福岡市
			NAT	1985 (25 歳)	0- 福岡県福岡市
若 06F	2008	52 分 36 秒	INM	1982 (25 歳)	0- 福岡県福岡市
			YON	1982 (25 歳)	0- 福岡県福岡市
若 07F	2008	49 分 49 秒	GOA	1982 (25 歳)	0- 福岡県福岡市
			YON	1982 (25 歳)	0- 福岡県福岡市
若 08F	2009	26 分 5 秒	FUN	1986 (22 歳)	0- 福岡県福岡市
			HAN	1986 (22 歳)	0-1 福岡県福岡市 1-2 埼玉県 3- 福岡県福岡市
若 09F	2010	34 分 43 秒	TAM	1989 (20 歳)	0- 福岡県福岡市
			UCA	1989 (20 歳)	0-7 福岡県福岡市 8-11 福岡県宗像市 12-14 熊本県熊本市 15- 福岡県福岡市
若 10F	2010	35 分 42 秒	NOS	1989 (21 歳)	0- 福岡県福岡市
			IZS	1990 (20 歳)	0- 福岡県福岡市

(a) 代名詞的用法：準体助詞が、前後の文脈から読みとれる何らかの名詞の代わりになっている。

- (5) あの赤い {の/ト} はリンゴだ。 (用言に接続)
 (6) この本は僕 {の/ノト⁵⁾}。 (名詞に接続)
 (7) こんな {の/ト} があっても役に立たない。 (連体詞に接続)
 (8) テレビで特集みたいな {の/ト⁶⁾} をやっている。 (形容動詞に接続)

(b) 名詞節用法：用言・体言 (+ コピュラ「ナ」) に接続し、名詞節を作る。

- (9) 本を貸す {の/ト} はかまわないけど、ちゃんと返してね。
 (用言に接続)
 (10) 梅雨だから、毎日雨な {の/ト⁷⁾} はしかたがない。 (名詞に接続)

(c) ノダ文：従属節・主節を問わず、ノダ文⁸⁾を作る。

- (11) 今から買い物に行く {ん (の) だ/ノッチャ⁹⁾} けど、一緒に行かない?
 (12) 僕、今度引っ越す {ん (の) だ/ト¹⁰⁾}。
 (13) 本当に引っ越す {の/ト}?

ここで、福岡市方言のノダ文について少し説明を加えておく。伝統的な福岡市方言においては、動詞・形容詞の場合には準体助詞トが接続し、ノダ文を作ることができるが、標準語と違って「体言+コピュラ+準体助詞」といった構造が作れず、準体助詞が接続するノダ文が存在しない。

- (14) 行く 行くト (動詞)
 (15) 暑い 暑いト (形容詞)
 (16) 雨 *雨なト (名詞)

しかしながら 1 節でも述べたように、若年層においては体言にトが直接接続することで、体言の場合でもノダ文を作ることができるようになっている。

- (16') 雨 雨ト¹¹⁾ (名詞)

ただし、原田 (2007) が指摘するように、体言のなかでもトが接続しやすいものと、そうでないものがあることがわかっている。たとえば、形容動詞語幹(「だめト」など)はトの接続を許しやすいが、それと比較すると名詞(「アメ

リカト」など)は許容度が下がっている。細かくいえば、許容度の高い形容動詞語幹のなかでも、「だめト」より「きれいト」の方が許容度はやや落ちる。このように、もともと伝統的でなかった体言のノダ文については、語彙的な問題を含んでいる。よって体言に接続する準体助詞の分析を行った場合、そこにバリエーションがみられたとしても、それが本稿で問題にしている用法の違いによるものであるのか、それとも語彙的な接続のしやすさ/しにくさ (=そもそもノダ文を作れるかどうか)に起因するのか、判断がつかない部分が多い。以上のような理由から、伝統的に体言に準体助詞が接続する代名詞的用法(5.1節で述べる)以外では、分析の対象を用言にしぼったうえで、使用実態の提示を行っていくことにする。

5. 調査結果

ここでは、4節で示した分類基準をもとに調査結果を提示していく。テキストで得られた準体助詞は、高年層が合計1,472例、若年層が合計1,423例あった。以下、5.1節で代名詞的用法について、5.2節で名詞節用法について、5.3節でノダ文についての結果を提示する。

5.1. 代名詞的用法

まず、代名詞的用法のうち、用言の場合の用例の分布を以下に示す。

表3 代名詞的用法の用例数 (用言の場合)

	ト	ノ	ン	合計
高年層	100	98	0	198
若年層	0	80	0	80

高年層ではト(例文(17))とノ(例文(18))が併用されているが、若年層においてはトは1例もみられずすべてノ(例文(19))で実現している(例文中のカッコ内は筆者注)。

(17)【高06F】YAC: 今、若い人みたらさ、あー、やっぱ、私も、若いときは、高いト (=靴) ばかり履きよったけどなー。よう思うて

みるよ。

(18)【高 10F】MIC：そうね、けなすノ（＝ことば）が多かね。

(19)【若 01M】HAS：イオン鹿児島っていうノ（＝商業施設）ができたっ
たい。

以上のようなことから、このようなト ノの変化はすでに高年層においても始
まっていたということが指摘できる。

続いて、名詞・連体詞・形容動詞の用例数を示す。表4のうち、名詞のトに
ついては、注5に述べたようにノト・ントの形をとるものである。

表4 代名詞的用法の用例数（体言の場合）

	名詞			連体詞			形容動詞		
	ト	ノ	ン	ト	ノ	ン	ト	ノ	ン
高年層	25	4	0	32	8	2	7	4	0
若年層	0	8	0	0	3	17	0	12	2

高年層においては、名詞（例文（20））・連体詞（例文（21））・形容動詞（例文
（22））もトが用いられていることが確認できた。ただし注6で示したように、
（22）のような形容動詞につくトが方言に本来的なものであるかどうかは不明
である。

(20)【高 06F】YAC：私んト（＝携帯電話）やないよ。

(21)【高 01M】MAH：ご飯炊くね、あげなト（＝道具）やらいる。

(22)【高 10F】NAY：にわかのようなト（＝遊び）もあると？

一方、若年層においては体言の場合もトが1例もみられないことがわかる。こ
の事実は原田（2007）でも報告されているが、本調査でも同様の結果が得られ
たということになる。ただし連体詞の場合¹²⁾はン（例文（23））が多くみられ、
ノ（例文（24））は数が少なかった。

(23)【若 04M】MIT：あんなン（＝ハンバーガー）食ったらマックのチー
ズバーガー食えんよ。

(24)【若 02M】MAG：クラブってどんなノ（＝クラブ）？

わずか2例ではあるが、形容動詞の場合にもンの使用がみられた。

(25)【若 03M】UJK：やけんなんとか原論みたいなん（＝授業）とか、

なんかそういうの、4つぐらい、取っと、まあ取ってあるけん、今から全部取らないかんわけじゃないと思うけど。

- (26) 【若 05M】 NAT : 最近、なんかちゃんぼん、ちゃんぼん、屋、で、ちょっとラーメンも、あるみたいなン (=店) ができて、そこ最近行くかな。

このように、体言の場合でも連体詞に接続するものについては、ンという準体助詞が多く用いられるようになっていく。このことから、この用法のなかでもソナンなどの固定化された表現から先にンが用いられ始めていくことになる。そして、その変化は (25)、(26) のような形容動詞の場合にも広がり始めていくのではないかと考えられ、チャンク的なものから生産的なものへと変化しつつある段階にあると思われる。

5.2. 名詞節用法

続いて、名詞節用法における用例の分布についてみてみよう。

表 5 名詞節用法の用例数 (用言の場合)

	ト	ノ	ン	合計
高年層	75	53	0	128
若年層	0	83	0	83

5.1 節で示した代名詞的用法と同様に、高年層ではある程度ト (例文 (27)) の使用がみられる一方、若年層においてはノ (例文 (29)) のみが出現している。

- (27) 【高 09F】 OTK : 玉屋が動物園やったト知っとる？

- (28) 【高 06F】 YAC : なかなか足を踏み込むノがね、ちょっと時間がかかった。

- (29) 【若 06F】 YON : でも修理するノたいがいお金かかる？

5.3. ノダ文

最後にノダ文についての調査結果を述べる。ノダ文については、出現する環境によって準体助詞の現れ方に違いがみられたため、分けてみていくことにす

る。以下、5.3.1 節で準体助詞トが出現しやすい環境について、5.3.2 節で出現しにくい環境についての調査結果を示す。

5.3.1. トが出現しやすい環境

伝統方言形の準体助詞トが出現しやすいノダ文の環境として、言い切り文（準体助詞で文が終わる）の場合、疑問文の場合、伝統方言的な終助詞類が接続する場合の3つがあった。それぞれについて、5.3.1.1 節、5.3.1.2 節、5.3.1.3 節で述べる。

5.3.1.1. 言い切り文

ここでいう言い切り文とは、

(30) 【若 10F】NOS : しかもサイドブレーキ下りんと。

のように、ノダ文のうち準体助詞で文が終わり、それ以上終助詞などが何も後接しない平叙文を指している。ンが言い切り文に用いられることはないため、ここではトとノのみが問題になる。

表 6 言い切り文の用例数（用言の場合）

	ト	ノ	合計
高年層	78	0	78
若年層	21	1	22

5.1 節、5.2 節で述べてきた結果とは違い、ノダ文の言い切り文の場合は、高年層のみならず若年層においても1例を除きすべてトが用いられている。

(31) 【高 07F】AOK : それ毎週土曜日きてやりござったト。

(32) 【若 01M】FUY : 薩摩弁がね、反映しとうト。

5.3.1.2. 疑問文

疑問文は、5.3.1.1 節で示した言い切り文と同様にトで文が終わり、上昇イントネーションをとめない疑問の意味を表すものである。

表7 疑問文の用例数 (用言の場合)

	ト	ノ	ン	合計
高年層	93	2	0	95
若年層	144	12	5	161

疑問文では、高年層は5.3.1.1節の言い切り文の場合とほぼ同様の結果が得られたが、若年層においては、ト・ノ・ンの3つのパリアントが混在して使用されていた。ただし、

(33)【若09F】TAM：なんで電話かかってくるト？

のように、トが多く用いられており、ノ(例文(34))ヤン(例文(35))はや数が少なかった。

(34)【若03M】TOY：対象があるかってことじゃないノ？

(35)【若10F】IZS：なんで？会ってどうするン？

5.3.1.3. 伝統方言的な終助詞類が接続する場合

主節末において方言的な終助詞類タイ¹³⁾・ヤン¹⁴⁾が接続する場合は、高年層・若年層を問わず、トしか用いられない。また、若年層ではトタイ・トヤンは、実際にはツタイ・ツチャンという形でしか現れない。

表8 伝統方言的な終助詞類接続の用例数 (用言の場合)

	ト	ノ	ン	ト	ノ	ン
	タイ			ヤン		
高年層	264	0	0	94	0	0
若年層	76	0	0	154	0	0

(36)【高03M】HAM：「よござす」ち言わっしゃったツタイ。

(37)【若01M】HAS：おれ桜島におびえないかん生活が始まるツタイ。

(38)【高05M】MIK：山になったら元気になってくるツチャンね。

(39)【若10F】NOS：サニーに停めたツチャン。

先に述べたように、若年層ではツタイ(例文(37))・ツチャン(例文(39))という形でしか現れないが、高年層では264例中10例がトタイ(例文(40))、

94 例中 1 例がトヤン（例文（41））という形で現れた。

(40)【高 01M】MAH：「よかばい」で言わっしゃーけどそげんするやつ
がおるトタイもう。

(41)【高 06F】SUC：あたし何回も聞くトヤン。

ただし、たとえば、疑問を表す伝統方言の終助詞カイナは、トに後接しても*ツカイナのようにトと融合することはないが、高年層 15 例、若年層 32 例のすべてにトが用いられる（すべてトカイナで実現）。このような事実から、終助詞と融合しているかどうかは準体助詞の選択には関わっていないようである。

5.3.2. トが出現しにくい環境

次に、トが出現しにくい環境（＝ノ・ンが出現しやすい環境）についてまとめる。トが出現しにくい環境としては、逆接を表す接続助詞（ヤ）ケドが接続する場合、非伝統方言的な終助詞類が接続する場合の 2 つがあった。

5.3.2.1. (ヤ) ケドが接続する場合

ここでは、逆接を表す（ヤ）ケドについての結果を示す¹⁵⁾。

表 9 (ヤ) ケドの用例数 (用言の場合)

	ト	ノ	ン	合計
高年層	7	0	3	10
若年層	82	2	50	134

*若年層の ノ+ヤケド の例はすべて 否定辞ン+ノ+ヤケド¹⁶⁾

高年層においても若年層においてもト（例文（42）、（43））が用いられていることが確認できるものの、ン（例文（44）、（45））の使用もかなりみられた。

(42)【高 10F】MIC：タノアメてアメ屋さんやったツチャケド。

(43)【若 05M】ENT：全体でみると低いツチャケド、新卒は、4 割通つ
とったい。

(44)【高 10F】MIC：あたしは自分で、読んだンヤケド、見たンヤケド。

(45)【若 09F】UCA：髪ぼさぼさになつとンヤケド早くない？

なお準体助詞がトの場合、高年層では 7 例中 3 例が、若年層においては 82 例

すべてが例文 (42)、(43) のようなツチャケドという融合した形であった。ただし表9で示したように若年層においてモンが多用されていることから、準体助詞とコピュラが融合していることは準体助詞の選択に影響を与えているわけではないようである¹⁷⁾。

5.3.2.2. 非伝統方言的な終助詞類が接続する場合

最後に、非伝統方言的な終助詞ヨ・ヨネ¹⁸⁾が接続する場合についてまとめる。

表 10 非伝統方言的な終助詞類接続の用例数 (用言の場合)

	ト	ノ	ン	ト	ノ	ン
	ヨ			ヨネ		
高年層	93	0	20	4	0	6
若年層	19	1	50	0	4	16

* 若年層の ノ+ヨ/ヨネ の例はすべて 否定辞ン+ノ+ヨ/ヨネ¹⁹⁾

高 07F の MAM によるンの使用がかなり目立っているものの (ンヨ 11 例・ンヨネ 5 例)、5.3.2.1 節で示した (ヤ) ケドの場合と同様に、高年層において蒙の使用があることが指摘できる。

(46) 【高 02M】 UET : ほいでね、東光院って、吉、吉塚に東光院っていうお寺があるったい。でその東光院に猫塚というのがあるンヨ。

(47) 【高 07F】 MAM : 焼け残ったンヨネ、確か。

若年層においては高年層でもみられた蒙の使用がさらに増加し、特にヨネにおいてはトが用いられなくなっている。

(48) 【若 04M】 OTT : 「祝いめでた歌ってくれ」って言いよったらしいンヨ。

(49) 【若 02M】 FUY : 息がつまるときあるンヨネ。

6. 考察

5 節で提示した調査結果をまとめると、以下の図 1 のようになる。

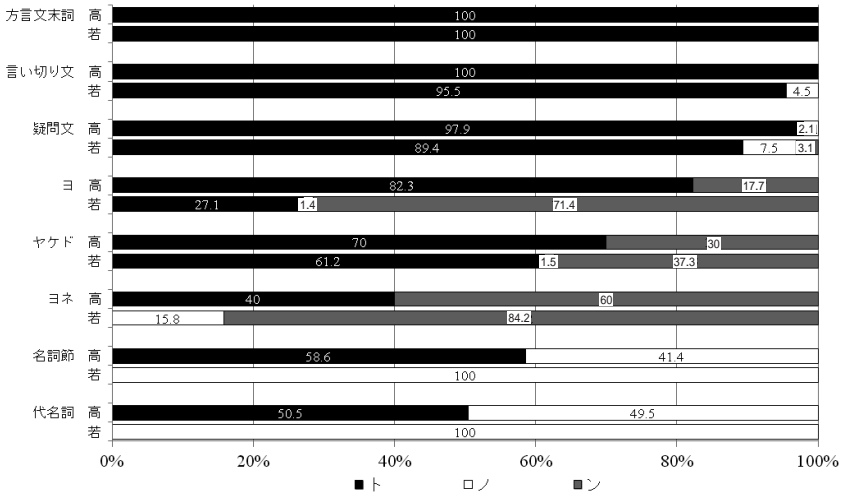


図1 準体助詞の使用実態（用言の場合。「高」は高年層、「若」は若年層）

福岡市方言の準体助詞の使用には、高年層から若年層にかけて大きく以下の2つの変化がみられる。

- () 代名詞的用法や名詞節用法においてはノ専用になる一方、ノダ文においてはトが用いられている。
- () ノダ文においてはトが用いられているものの、その現れ方は一様ではなく、出現する環境によって違いがある。準体助詞に非伝統方言的な要素が接続する場合は、非伝統方言的なノ・ンが現れやすくなる。

ノヤンといった非伝統方言形は、形式から判断して標準語や周辺の方言²⁰⁾との接触によってもたらされたものであると考えるべきである。以下、6.1節で()の変化について、6.2節で()の変化についての考察を行う。

6.1. () の変化

まず()の代名詞的用法と名詞節用法については、高年層においてはまだトとノが併存している状態であったが、若年層にかけてバリエーションが淘汰され、非伝統方言形であるノのみが用いられるようになったという変化が起こっている²¹⁾。一方、ノダ文においては、()で指摘したように出現する環境によって現れ方に違いはあるものの、伝統方言形であるトの使用が確認できる。

このような変化のあり方については、モダリティに関わっているかどうかが決める手になっていると思われる。平塚（2009）で取り上げられている福岡市若年層方言のデハナイ（カ）相当形式も、準体助詞と同様にモダリティに関わる用法とそうでない用法にまたがって用いられるが、デハナイカ 類（否定）のようなモダリティに関わらない用法においては、非伝統方言形ジャンイが受容され、高年層が多用していたヤナイは姿を消してしまっていることがわかっている。これと同様に、代名詞用法や名詞節用法はモダリティに関わるものではないため、若年層においてはトが用いられなくなり、非伝統方言形であるノが用いられるようになったものと考えられる。一方のノダ文は、モダリティに関わっている用法である。郡（1997）、玉懸（2001）、吉田（2011）などが、伝統方言形の維持とモダリティの関係性について論じているが、（ ）の変化からは、モダリティに関わらない用法が非伝統方言形に置き換わりやすいのではないかと考えることができる。

6.2. （ ）の変化

ノダ文におけるそれぞれのバリエーションの現れ方については、準体助詞そのものの性質というより、それに後接する要素が接触によってもたらされたものであるかどうかということに注目する必要がある。逆接を表す（ヤ）ケドも終助詞ヨ・ヨネももともと伝統方言的な要素ではなく、どちらが後接する場合も、高年層から若年層にかけて非伝統方言的なノが用いられやすくなっている。このように、接触により取り入れられた要素が後接しているため、高年層から若年層にかけてトが現れにくくなったのであろうと考えられる。一方、言い切り文や疑問文、伝統方言的な終助詞類が接続する場合には、そのような制限がないため、トが維持され続けているのであろうと思われる。

また、用例数が少なかったため5節では詳しく触れなかったが、注15で示した高年層の逆接を表すパッテン（16例）、高・若年層の原因・理由を表すヤケン（高年層46例・若年層6例）についても、ノ・ンが現れることはなく、すべてトが用いられていた。これらパッテン、ヤケンも、もともと伝統方言形として存在していたものであり、ここにはノ・ンは受容されていないことがわかる。このような事実も、非伝統方言的な要素の後接がノ・ンの受容に関わっ

ていることを裏づけている。

7. まとめと今後の課題

以上、本稿では福岡市方言の準体助詞の使用実態を観察することで、どういった用法や環境に現れるものが非伝統方言形に置き換わりやすいのかについて論じた。おおまかにまとめると、代名詞的用法と名詞節用法では非伝統方言形に置き換わりつつあり、ノダ文においては伝統方言形トが維持されやすいが、準体助詞に非伝統的な要素が後接する場合には非伝統的方言形ノ・ンが現れやすいということがわかった。今後は、本稿で取り上げたように、伝統方言形が使用され続ける現象、つまり方言の維持と変化が同時に観察される項目についての事例研究を積み重ねつつ、なぜ維持されるのか/なぜ変化が起きるのかということについて考えていく必要がある。

注

- 1) 本稿でいう「伝統方言」とは、平塚 (2019) にしたがって、地域ごとに受け継がれてきた方言のことで、メディアや交通網の発達による標準語化を強く受けるようになる前の姿のことを指す。
- 2) 本稿でいう「非伝統方言」とは、標準語や他方言など、伝統方言以外のバリエーションを指す。
- 3) ただし、太田 (2009) は福岡県南部の大牟田市の方言を対象に論じたものである。
- 4) 用例の収集にあたっては以下の点に留意した。まず、発話された文がデス・マスをとまなう丁寧体であった場合には、特に若年層において標準語スタイルになってしまうため、デス・マスをとまなわない普通体のみを分析対象をしぼっている。また、何かしらの発話を引用している場合には、話者自身の使用例ではないと考えたため除外することにした (話し手自身の発話の引用であっても除外)。
- 5) ノトはノが属格格助詞、トが代名詞の役割をはたしている。現代標準語ではこれがノという形になっており、*ノノのような形は存在しない。よって例文 (6) で「名詞に接続」としているが、正確には福岡市方言では準体助詞そのものは「属格格助詞に接続」している。なお、福岡市方言では属格格助詞としてンが用いられることもあるため、ントという形も存在するが、本稿ではこの違いは特に問題としない。
- 6) 後述する高年層の調査結果にこのような例がみられたが、形容動詞に接続するものが方言に本来的であるかどうかは不明である。この問題を取り上げた陣内

(1993)にはこのような例はみられない。

- 7) 注6同様、方言に本来的なものであるかどうかは不明である。
- 8) ノダ文の詳細については、野田(1997)などを参照されたい。
- 9) トとコピュラ「ヤ」の融合したもの。
- 10) 伝統的な福岡市方言では標準語の「僕が行くんだ。」のようにコピュラで文が終わることがなく(坪内1995、原田2009など)、「*僕が行くトヤ。」とはいえない(「僕が行くト。」は可)。
- 11) さらに、坪内(1995)にも指摘があるが、近年では非伝統方言的なナンという形式が用いられることもある。
- 12) 伝統方言的なソゲナなどはみられず、すべてソナなどの標準語形と同形のものであった。
- 13) タイにみられる言語変化については、平塚(2011)に詳しい。
- 14) ヤン(<ヤモン<ヤモノ)については、坪内(1995)に詳しい。
- 15) 高年層ではノダ文に現れる(ヤ)ケドは10例しかなく、伝統方言形であるバッテンの16例よりも数が少なかったが、若年層にバッテンの使用例はなかった。なお、高年層のバッテン16例にはノ・ンが前接することはなく、すべてトが用いられていた。
- 16) ちなみに若年層の否定辞ン+ト+ヤケドの例は5例みられた。
- 17) この場合のように、若年層においては準体助詞トとコピュラ「ヤ」が連続すると、必ずツチャという融合形で実現する。
- 18) 「標準語的」としているが、表10から明らかのように高年層においても多く用いられている(特にヨ)。
- 19) ちなみに若年層の否定辞ン+ト+ヨの例は1例みられた。
- 20) はっきりとどの方言の影響によるものかはわからないが、同じ福岡県内でも豊日方言域では準体助詞にンが用いられることがよくあり、日常的な接触は多いと思われる。
- 21) ただし5.1節で示したように、代名詞的用法のうち、体言に接続する場合には、ンの使用がみられることもある。

参考文献

- 太田一郎(2009)『地方中枢都市から周辺地域への言語伝播——福岡県南部の場合——』『鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集』69, pp. 29-40, 鹿児島大学法文学部。
- 郡史郎(1997)『総論』平山輝男(編)『日本のことばシリーズ27 大阪府のことば』pp. 1-61, 明治書院。
- 陣内正敬(1991)『博多方言文末助詞「-ト」の新用法と語彙拡散』『九大言語学研究室報告』12, pp. 51-59, 九州大学文学部言語学研究室。
- (1993)『地方中枢都市方言調査報告——福岡市・北九州市——』九州大学言語文化学部日本語科。

- (2006) 「方言の年齢差 — 若者を中心に —」 『日本語学』 25-1, pp. 42-49, 明治書院.
- ・坪内佐智世 (1995) 「地元意識と開放性の共存する都市方言」 『言語』 24-12, pp. 150-165, 大修館書店.
- 玉懸元 (2001) 「宮城県仙台市方言の終助詞「ツチャ」の用法」 『国語学』 52-2, pp. 30-44, 日本語学会.
- 坪内佐智世 (1995) 「福岡市博多方言における「だ」相当助詞に現れるモダリティ」 『KLS』 15, pp. 25-35, 関西言語学会.
- 二階堂整 (2008) 「若年層にみる最近の福岡方言の動き」 山口幸洋博士の古希をお祝いする会 (編) 『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』 pp. 100-112, 桂書房.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』 くろしお出版.
- 原田走一郎 (2007) 「若年層の福岡方言における「-ト」の接続について」 『思言 東京外国語大学記述言語学論集』 2, pp. 170-177, 東京外国語大学記述言語学研究室.
- (2009) 「九州方言の繫辞動詞」 『日本語文法学会第10回大会発表予稿集』 pp. 91-96, 日本語文法学会.
- 彦坂佳宣 (2006) 「準体助詞の全国分布とその成立経緯」 『日本語の研究』 2-4, pp. 61-75, 日本語学会.
- 平塚雄亮 (2009) 「福岡市若年層方言のデハナイ(カ)相当形式に見られる方言接触」 『待兼山論叢 日本学篇』 43, pp. 53-70, 大阪大学文学会.
- (2011) 「方言の維持と変化 — 福岡市方言の文末詞タイを例に —」 『日本語学会2011年度秋季大会発表予稿集』 pp. 147-154, 日本語学会.
- (2019) 「言葉の変異と諸方言」 衣畑智秀 (編) 『基礎日本語学』 pp. 212-233, ひつじ書房.
- 山口堯二 (2000) 『構文史論考』 和泉書院.
- 吉田雅子 (2011) 「『口語法分布図』と『方言文法全国地図』の比較対照による言語変化の諸相」 『日本語学会2011年度秋季大会予稿集』 pp. 163-170, 日本語学会.

(文学部専任講師)